

巻頭言

本との再会

情報工学科 松村寿枝

本について何かを書こうと思ったとき、そういえば、最近ゆっくり本を読んだことが無いなということに気が付きました。時間がないとかいろいろな理由をつけて読んでいないこともありますが、高校生や大学生だったころあるいはもっと前の小中学生のころから結構、本を読んでいた気がします。それでは、学生の皆さんと同じ年のころはどんな本を読んでいたのだろうと思い出してみました。当時は、電子書籍なんてないので、文庫本やハードカバーと呼ばれる本を読んでいた。ただ、毎回購入してはもったいないので、近くにあった県立図書館、市立図書館、学校の図書館それぞれで借りてきて読んでいました。今と違って、時間はあるほうだったので、ライトノベルのような優しいものから、ちょっと難しいものを背伸びして読んでいました。丸山圭三郎や宮本輝、谷崎潤一郎、田辺聖子、栗本薫、村上春樹、高橋源一郎など読んだのもこのころです。また、当時ベストセラーとなった本の何冊かは入手して読みました。その時は、ベストセラーになった本に対しても、特に感銘を受けるでもなく、ただただ、読んでおいた方がいいだろうというノルマのように読んでいました。

ところが先日部屋の片づけをしていた時に高校生当時読んでいた本がいくつか出てきました。ハードカバーですし、当時としてはお小遣いをはたいて買ったものなので処分せずにとっていたものですが、今回、処分をするつもりで最後に読んでみようと思い取りました。高校生の頃は、何も感じなかったはずなのに、「なるほど、ここに書かれていることはこういう意味だったんだ」と登場人物の心象風景、心理描写が手に取るようにわかりました。20年以上の時を経て、本と再会した…まさにそのような感覚です。この感覚を本との再会と名付けてみたくなりました。それでは、当時は大好きでよく読んでいた作家の本も今ではほとんど読むこともなくなりました。これは本との別れでしょうか。

本の感想、受け取り方は、読む人の心の成長によっても変わってくるものだと思います。ぜひ、これから皆さんは、たくさん本を読んでください。そして、20年は大袈裟ですが、何年か後にまた読んでみてください。違った感想を持つと思います。それが本との再会です。その時には、今とは違った読み方ができる新しい発見があります。皆さんもぜひそのような体験を試してみたいと思います。そして、私は、当時、挫折をしてしまい、本棚に眠っているロシア文学の1つにチャレンジしてみたいと思います。